

松 山 大 学 論 集
第 33 卷 第 5 号 抜 刷
2 0 2 1 年 12 月 発 行

稲生晴学長と松山商科大学の歴史（下）

川 東 靖 弘

稲生晴学長と松山商科大学の歴史（下）

川 東 靖 弘

目 次

はじめに

1) 1980 年 1 月～ 3 月

2) 1980 年度

3) 1981 年度

4) 1982 年度 (以上, 前号)

5) 1983 年度 (本号)

6) 1984 年度

7) 1985 年度

おわりに

5) 1983 年度

稲生晴学長は 4 年目である。本年は創立 60 周年の記念すべき年にあたる。

経済学部長は高橋久弥に代わって、田辺勝也が就任した（1983 年 4 月 1 日～1985 年 3 月 31 日）。経営学部長は高沢貞三、人文学部部長は渡部孝、大学院経済学研究科長は入江奨が引き続き務めた。経営学研究科長は元木淳に代わって井上幸一が就任した（1983 年 4 月 1 日～1985 年 3 月 31 日）。

全学の校務体制は、教務委員長は原田満範が続けた。学生委員長は青木正樹に代わって、前田繁一が就任した（1983 年 4 月 1 日～1985 年 3 月 31 日）。入試委員長は増田豊が続けた。図書館長は田辺勝也に代わって（学部長就任のため）、神森智が就任した（1983 年 4 月 1 日～1985 年 12 月 31 日）、経済経営研究所長は山口卓志が続けた。事務局長は竹田盛秋が続けた。

学校法人面では中川公一郎、望月清人、岩国守男が理事を続け、稲生理事長

を支えた¹⁾

本年度も新しい教員が採用された。経済学部では東京工業大学助手の光藤昇（統計学）を講師として採用した。また、本年度から外国人特別講師が採用され、一般教育英語担当者（口頭英語特別プログラム）として、経済学部にダビッド・ウィリアム・ポーター（米国）、経営学部にウィリアム・ジョセフ・スネル（英国）の2人が採用されている（2年契約、6コマの担当）²⁾

4月1日、稲生学長は新入生に対し、『学園報』第59号に「入学の諸君へ 商大で学び世界に翔べ」と題し、挨拶文を載せ、諸君はこれまで世界に類をみないハードな受験勉強をやってきたが、今後大学で自らを開放し、自主的でゆとりある生活に切り替え、大学で新しい学問と技芸を磨いてほしい。そして、試練から逃げるのではなく、自ら試練に立ち向かい、世界に羽ばたいてほしい、と呼びかけた³⁾

4月1日、午前10時より本学体育館において入学式が行なわれ、経済学部443名、経営学部444名、人文学部英語英米文学科107名、同社会学科152名、合計1,146名が入学した。また、経済学研究科修士課程2名、博士課程1名、経営学研究科修士課程2名が入学した⁴⁾

稲生学長の式辞は次の通りで、本年が創立60周年の年であり、推薦入学生が初めて入学した年度であり、大学の使命を認識し、自らの頭で主体的に考え、分析、構想する能力を身につけるよう訴えた。

「天地躍動の気に満ちたこの佳き日、茲に多数の来賓各位並びに父兄の御臨席を得て、昭和五十八年度の大学入学式を挙行できます事は、本学のもっとも慶びとするところであります。

1) 『学内報』第76号、1983年4月。『六十年史（資料編）』126～131頁。

2) 『学園報』第59号、1983年4月1日。

3) 稲生晴「入学の諸君へ 商大で学び世界に翔べ」『学園報』第59号、1983年4月1日。

4) 『学園報』第59号、1983年4月1日。『学内報』第77号、1983年5月1日。『六十年史（資料編）』161、174頁。

本日の栄ある入学式に寄せられた関係各位の御祝意に対しまして厚く御禮申し上げますとともに、入学生並びにご家族の皆様に対しましては衷心よりお祝い申し上げる次第であります。本学にとりまして、本日からスタートする新年度は二つの点で画期的な意義をもつものであります。

第一は、本学の創立六十周年の年に当たるということであります。大正十二年（一九二三年）、新田長次郎温山翁、加藤恒忠拓川、加藤彰廉の三恩人によって創設されて以来、松山高商、松山経専、松山商科大学と発展して、ここに学園の還暦を目出度く迎えるに至ったのであります。新入生諸君は創立以来第六十回目、大学制度になってから数えると第三十五回目の記念すべき入学生であります。大学は六十年の星霜を経て、清新な諸君を迎え、新たな発展をめざして力強く前進することを願う次第です。

エポックメイキングの第二は、新制大学になってから本日初めての推薦入学制度による入学生を迎えた事です。この第一回の推薦入学の諸君が一般入試の関門をくぐってきた諸君と一体となって活躍して、大学の士気を高揚し、大学の名を高めることを期待してやみません。別々の狭き門から入学してきた者が、それぞれの誇りをもって競い合い、学生活動が全体として、盛大になることこそ学園発展の基本的エネルギーであると確信します。

扱、入学生諸君は、小、中、高校と十二年にわたる長い学校生活を経過して、愈々これから最後にして最高の学生生活に入る訳であります。時間というものは人間にとって初めは長く、終りは短いものです。諸君の大学生活の成功を祈って激励の言葉を申し上げたいと思います。

本学の目的、使命は学則の冒頭に明記されています。すなわち、「本学は経済、経営、人文を中心とする諸科学の総合的専門的研究および教授を行なうことを目的とし、学識深く教養高き人材を養成して広く社会の発展に寄与することを使命とする」と述べられている通り、松山商科大学は何よりもその固有の学問研究の機関であり場所であります。満十八才以後の

数年間は、人間としての一生にとって最も重要な時期であります。学問と格闘して自己を鍛えることは素晴らしい事です。大学は学問を通じて自分の隠れた能力をひき出す場所であって、怠惰と無為のレジャーランドではありません。個人的にも、社会的にも、大学を遊園地化してはならぬのであります。これまでの諸君の学習は概して知識習得型と評されるものであり、既成の知的産物を鵜呑みにしていくという傾向が強かったのではないのでしょうか。これから諸君がやるべき事は知識を更に広くすると共に、特にものを考える力、構想力、展開力を身につける事です。大学での勉強の仕方は、自らの肩の上にのせた自らの頭でものを考える主体的、創造的能力の開発、養成、鍛錬でなければなりません。自らの頭で観察し、分析し、推理し、構成する事をくり返しくり返し実行して欲しいものです。

扱、最後に本学における諸君の大学生活の基調として戴きたい五つの心かけを申し上げたいと思います。

第一は、大学の選択に徒らに心を迷わせない事です。商大に身も魂も定住して大学生活の真の内容づくりに挑戦することです。第二は、大学生活の目標を定めることであります。何をやるのか、的を絞る事です。第三は、師友関係のあらゆる人間にたいし、又、大学のあらゆる事柄に対して積極果敢に行動する事です。臆せず、ためらわず、まずやってみる事です。第四は、素直さであります。素直な心で学ぶことが上達の秘訣であります。第五は、それぞれ定めた目標に向って、牛の如く鈍重に粘り強い努力を貫き通すことです。どうか諸君が本学でその青春を爆発させて、自己の人間的能力を十分に開発して下さい。やがて迎える卒業の時、私はやりました、商大で学んで本当に倖せでした、と言える学生生活を築かれること祈ってやみません。諸君に衷心より歓迎の意を表し、所懐の一端を述べ、激励の言葉と致します。

昭和五十八年四月一日

松山商科大学長

稲生 晴 J⁵⁾

稲生学長は昨年12月に学長再選の際、はじめて校訓「三実主義」について言及し、その具体化を表明したものの、この式辞において何も言及していない。

7月、今秋の60周年記念事業計画が発表された。それは、次の通りであった⁶⁾

1. 11月5日に記念式典および祝賀会をひらく。
2. 総合運動施設建設（農業用水池の松田池を埋め立てた御幸グラウンドの北側に隣接する傾斜地約3万平方メートルに50メートルプール、部室、音楽練習場、管理・研究棟、トレーニングセンター等）のための募金。
3. 大学の構想と将来計画の委員会（学園構想委員会）設置（校名の変更、学園の規模、教育研究内容、施設計画、学部学科の編制等の検討）
4. 学術研究調査（記念論文集、地域の産業、経済文化の調査等）
5. 年史編纂。

9月、60周年記念事業の一環として設置された「学園構想委員会」（委員長望月清人理事，委員，前経済学部長高橋久弥，経済学部長田辺勝也，経営学部長高沢貞三，人文学部長渡辺孝，短大学部長梶原正男，教務部長正岡謙二）の報告書が提出された。その大要は次の通りである⁷⁾

5) 松山大学総務課。

6) 『学園報』第60号，1983年7月20日。

7) 『学内報』第82号，1983年10月1日。

1. 校名

松山商科大学を松山大学に改称するというのが大方の意見である。

2. 学部編制および学部充実

社会のニーズに合った特色ある大学づくり、学部づくりを行なう。経済学部では国際経済に関する科目、地域経済、地域産業に関する学科目を新設する。経営学部は経営情報関係の学科目を充実する。人文社会科学はフィールドワークを重視する。

新学部として第1に考えられるのは法学部である。

3. 施設

外国人のための宿泊施設、セミナーハウス、スクールバス、厚生会館、ゼミ専用室、広い駐車場、緑陰と芝生がほしい。

この時、校名変更も、法学部も、外国人のための宿泊施設、セミナーハウス、スクールバス、厚生会館、ゼミ専用室も、特色ある学部づくりも、すぐには実現しなかったが、スクールバス、ゼミ専用教室を除き、着実に実現していくことになる。

9月24日、大学院入試（修士課程、9月期）が行なわれた。経済学研究科修士課程は3名が受験し、3名が合格した。経営学研究科修士課程は5名が受験し、3名が合格した⁸⁾

9月30日、前期卒業式が行なわれた。

11月5日、午前10時から本館6階ホールにて、白石愛媛県知事（代理）、中村松山市長（代理）、坂上愛媛大学学長らの来賓、卒業生など250名が参列し、創立60周年記念式典が挙行された。

稲生学長の式辞は次の通りで、松山高商・商大の歴史を述べ、幾多の艱難を乗り越え、60年の歴史を刻んだことに感謝の念を表し、本学の貴重な財産と

8) 『学内報』第82号、1983年10月。

して、学内の自治運営，自由，闊達な家族主義的学風，卒業生の活躍・母校愛，また，創立者新田長次郎翁の誠実・高邁な人格識見に感謝を表明し，本学の公共的性格，地域社会との密着性を論じ，本学の三実主義を論じ，第三の創学をめざし，今後，教員，施設の充実，現実に適応した教育方式の開発，研究機能の強化，開かれた大学づくり，国際交流の拡大等々に努めたいと抱負を表明した。

「本日は茲に来賓各位の御臨席を仰ぎ，松山商科大学創立六〇年を記念すべき式典を催すことができます事は誠に本学の光栄であり，深甚な感謝と抑え難い喜びを覚えるものであります。

御高承の通り本学は大正一二年，松山高等商業学校の設立に始まり，昭和一九年，松山経済専門学校，昭和二四年，戦後学制改革に伴い松山商科大学に転換して，今年めでたく隆昌のうちに学園創立六〇年を迎えることが出来たのであります。官公立および私立の旧制高等専門学校の中には戦時文教統制に，或いは又，戦後の学制改革に際会して，断絶の運命を辿り，一貫した校史の幕を閉じる事になった学校も少なくありません。本学が幾多の障害や艱難を乗り越えて，此の六〇年間一系の血統を保持し，いささか江湖の負託に応えて今日の発展をみました事は我々の大いなる誇りであります。これ偏に創立者を初めとする歴代多数の先考の御尽力，卒業生の母校愛，更に学外関係者各位のご支援の賜ものと深く肝に銘じ，衷心より感謝の念を捧げるものであります。

十年一昔と申しますが，昭和四八年の末，即ち本学五〇周年の祝賀の後に起きた第一次オイルショックは高度経済成長時代の終焉と経済構造の転換を迫る直接的な引き金となり，これを契機として内外経済は低成長と激動する変革の時代を迎え，前途多事多端な茨の道に入ったのであります。今や時代環境の大きな転換点に立って，我々は国とともに，企業とともに又家庭とともに，わが学園の未来を築く為に今日の課題に対応し，勇敢に

そして現実的にあくまで現実的に教育と研究の改善（変革）充実に取り組まなければなりません。その為には計り知れない苦労と苦心に耐えねばならぬと考える者であります。

幸いにして本学は誠に優れた恵まれた無形の資産をもっております。第一に挙げるべき事は創立以来六〇年間の一貫した学内自治運営と自由闊達にして家族的な学風（エトス）であります。第二番目は卒業生の活躍と母校愛（母校への帰属者意識）であり、第三は文教当局、学界および一般社会の評価と信用であります。一朝一夕に簡単に造ることのできないこの貴重な資産の相続者たる事を感謝し、これを守り、更に一層強め、高める責任を痛感するものであります。『万物は流転する』ものであります。存在するものは全て変化する事を余儀なくされています。この必然的变化を適応力と創造力によって成長発展とするか、硬直性（固陋性）と惰性によって衰退・滅亡するか—にかかって学園を構成する者の精神と実践にあると言わねばなりません。我々が常に心底に据えておくべき事は『学園は存在する。だがそれは常に新たに、日々新たに造る事によってのみ存在するのだ』という事であります。

創立六〇年を迎えたこの機会に心静かに先人の功績を（正しく深く）評定し（顕彰、検証）、さらに現状を冷厳に分析して限りなき未来に向かう創造的活動の課題と指針を明確にする事は我々に課せられた義務であります。私学としての本来の特色は教育を（教学）中心とした、学内教職員による自治的な経営管理体制であります。これは第一に創立者、新田長次郎温山翁の誠実にして高邁な人格識見とその一貫した方針と態度によって礎定されたものであります。創立の資金の殆どの金額を負担し創立後の経常費の大半、留学費の全額を支弁しながら学園の経営についても、例えば入学者選抜についても一切介入すること無く『学校のことは先生方に一任する』という方針を終生守り通され、尚新田家代々の態度として受け継がれ今日に至っているのであります。

ついで、本学の公共的運営の性格及び地域社会の密着性という特色の源流は創立時の社会的・地域的諸条件と多数の有力支援者に端を発していると考えねばなりません。第一次世界大戦の期に、日本経済は急成長し、それに伴う高等教育志願者の増加に対応して時の政府（原内閣）は高等教育機関の大々的な拡張計画を策定し、大正八年から大正一二年の六年間に官立の高等専門学校を倍增以上に増設したのであります。この時期、四国に最初の高等学校として、大正八年に松山高等学校、同一二年高知高校、徳島高等工業、そしてわが松山高商は一二年四月、翌一三年には高松高商が開設されたのであります。当時の社会的情勢と気運の下で松山に高校に加えて高商を設置し、四国四県の中で学術文化教育の中枢県にしようという県民有識者の先進的な意欲は、時の松山市長加藤恒忠（拓川）、北予中学校長、元大阪高商校長加藤彰廉、大阪で東洋の製革王と謳われた郷土の財界成功者新田長次郎（温山）三先人を動かしてその同志的結束を生み出し、ついに私立松山高商の設立を達成したのであります。

この創立の三恩人の外に、地域の要望を代表した方々の中から特に名を刻むべき人物として、北川淳一郎（松高教授）、井上要（伊予鉄社長）、清家吉次郎（県会議員）、さらに岩崎一高（衆議院議員、市長）、井上久吉（松山市長）、石原操（五十二銀行頭取）、野本半三郎（市会、県会議員）、服部寛一（松高校長）、村上半太郎（霽月、愛媛銀行頭取）、山内正瞭（東京高商教授）、八木春樹（県会議員）、由比質（松高校長）を挙げ永くその恩顧を忘れてはならぬと思う次第です。

以上述べた事で明らかなように本学は特定の個人の信念にもとづく教育事業として独自に造られたものではなく、地域社会の要請と地域の政界、財界、教育界の指導者によって設立されたものであり、私学でありながら私学臭さのない本学独特の公共的性格は本学のこのような出自に起因しているといつて過言でないと思います。そして繰り返し強調しますが、本学の全く私心のない良心的で誠実な運営、即ちその公共的性格は新田温山翁

に続く新田家歴代の方々の一貫した方針とそれに感謝しつつ歴代の諸先生方が学内自治運営を円滑且つ公正に行い、対立も紛争も生じる事なく、只々、教育と研究に集中する事によってその実を挙げる事ができたからであります。

本学は、その創立に当たって一定の教学イデオロギーを内外に宣明した所謂『私学の建学の精神』と称する經典を持っておりません。今日の本学の教学指針と学風は六〇年の学内自治体制の下で幾多の諸先生が自らの教学実践を通じて生み出されたものであり、これを理念面というならば、真実、実用、忠実を尊ぶ教学方針、即ち『三実主義』の精神であり、実態面においては非官僚的な自主、自由の気風（エートス）と親密なる人間交流の関係であると申せましょう。このような精神と学風は初代校長加藤彰廉によって醸成され、次いで『加藤先生の墓守』たることを自任して、若冠三六歳にして校長となった田中忠夫先生の強い信念と経倫によって成熟したのであります。学園の前期二〇数年間の師父であった両先生の功績は誠に重且つ大なるものであるといわねばなりません。

太平洋戦争は本学にも甚大な打撃をもたらしました。敗戦後の学園復興と新制大学への転換の苦心は想像を越えるものがあります。この時、松山高商、経専を断絶する事なく私立単科大学への道を選択し、松山商科大学商経学部を実現した諸先生の努力、在学生卒業生の支援、地域社会のご援助は本学の歴史における第二の輝かしい創学とも言うべきものであります。以来昭和二七年には短期大学部商科第二部の設置、三七年には大学商経学部を廃止して経済、経営二学部制とし、四七年には大学院経済学研究科修士課程、四九年に同大学院博士課程と人文学部の設立、五四年大学院経営学研究科修士課程、五六年に同博士課程を設けました。こうして、今日、本学は大学三学部四学科、大学院二研究科、博士課程、そして短期大学部をもって学生総数約四九〇〇名を擁する規模となりました。

扨て、全国大学樹林、特に私立大学は暴風雨の時代を迎えて、その樹勢

が問われています。六〇年生の工学も今や第三の創学を目指して、教員組織、施設機器の充実、現実に適応した教育方式の開発、研究機能の強化、開かれた大学づくり、国際交流の拡大、そしてこれを実現する為の財政基盤の強化に邁進しなければなりません。私はこの創学六〇周年の機会に際して三実主義の精神を高揚し、伝統ある学風を守り、吹き荒れる嵐の中で永遠の発展を期して一層、現状の革新と限りなき創造につとめる所存であります。

終りに臨み皆様方の多年にわたるご懇情を重ねて深謝するとともに向後末長きご指導とご高庇をお願い申し上げて式辞といたします。

昭和五八年一月五日

松山商科大学学長・理事長 稲生 晴⁹⁾

この創立 60 周年の記念式典の式辞について、少しコメントしておきたい。稲生学長は、田中忠夫編の『三十年史』（1953 年 11 月）を読み込み、その記述を踏まえた格調高いもので、加藤彰廉初代校長と並んで田中忠夫校長の功績を高く評価した。そして、校訓「三実主義」について、これまでの『学生便覧』では、星野通学長の説明により「真実・忠実・実用」の順序であったが、稲生学長は今回「真実・実用・忠実」の順序に変更した。それは、田中校長が 1941 年 4 月に述べた順序の復活となっていた。だが、この変更は、筆者がこれまで指摘した通り、田中校長を高く評価する余り、稲生学長の勇み足であったと思う。

そのあと、祝賀会を体育館に移し、稲生学長の挨拶、新野進一郎県商工会議所会頭、日野桂父兄会会長、新田長夫氏等の祝賀挨拶が述べられた¹⁰⁾

11 月 5 日、創立 60 周年記念事業としての県内の統計資料を網羅した『愛媛

9) 『学内報』第 84 号、1983 年 12 月 1 日。『学園報』第 61 号、1983 年 12 月 15 日。

10) 『学園報』第 61 号、1983 年 12 月 15 日。『学内報』第 83 号、1983 年 11 月 1 日。『学内報』第 84 号、1983 年 12 月 1 日。

県長期社会経済統計』が刊行された。それは、山口卓志研究所所長，研究所職員
の努力の賜物であった。

11月20日，1984年度の推薦入試が行なわれた。結果は次の通りであった¹¹⁾

	推薦入学人員	志願者数	合格者数
経済学部	約 90 名	118 名	106 名
経営学部	約 100	116	106
人文(英)	約 20	30	30
人文(社)	約 30	48	45

なお本年度も，学生の自主的研究活動の発表の場である，第23回中四ゼミ
(日時，場所未確認)，第30回全日ゼミ(11月21～23日，東北学院大学)が
開かれているが，その詳細は不明である¹²⁾

11月24日，学校法人松山商科大学評議員の任期満了(11月末)にともなう
評議員選挙が行なわれた。教育職員から，入江奨，岩国守男，岩橋勝，越智俊
夫，神森智，田辺勝也，高沢貞三，中川公一郎，比嘉清松，星野陽，山口卓志，
渡部孝が選ばれた¹³⁾

そして，12月1日の評議員会で新しい理事として中川公一郎(再任)，山口
卓志(新)，高沢貞三(新)が選出された¹⁴⁾任期は1984年1月1日から3年
間で，1986年12月31日まで。なお，経済学部の山口卓志はこの時43歳で
あった。

1984年2月1日から御幸総合運動施設の工事が着工した¹⁵⁾

11) 『学内報』第70号，1983年7月1日。『学園報』第60号，1983年7月20日。『学内報』
第84号，1983年12月1日。『学園報』第61号，1983年12月15日。

12) 松山商科大学経済学部清野ゼミナール『AD2001』第2号，1984年3月。清野ゼミは中
四国政治経済ゼミナール大会と全日ゼミ(インゼミ)に参加し，発表している。

13) 『学内報』第84号，1983年12月1日。

14) 『学園報』第61号，1983年12月15日。『学内報』第85号，1984年1月1日。

15) 『学内報』第86号，1984年2月。

同年2月10～12日、1984年度の一般入試が行なわれた。日程の順序が従来と変わり、10日が人文学部、11日が経済学部、12日が経営学部となった。募集人員は経済学部350名、経営学部350名、人文学部英語英米文学科80名、同社会学科100名であった（推薦を含む）。試験会場は、本学、京都、岡山、広島、福岡、高松の6会場であった。検定料は2万円。志願者は経済学部2,373名、経営学部2,508名、人文英語453名、人文社会984名であった。合格発表は2月21日。経済学部が957名、経営学部が957名、人文学部英語英米文学科が226名、同社会学科が323名（第1次補欠71名を含む）を発表した。学費は入学金は13万円（前年度と同じ）、授業料は30万円（前年度28万円）、施設拡充費は7万円（前年度6万円）、その他が2万9,350円で、合計52万9,350円で¹⁶⁾3万円の値上げであった。

2月17日、高沢貞三経営学部長の任期満了に伴う学部長選挙が行なわれ、井出正教授（教育心理学、61歳）が選ばれた¹⁷⁾

3月1日、入江奨大学院経済学研究科長の任期満了に伴う経済学研究科長選挙が行なわれ、伊達功教授（59歳）が選ばれた¹⁸⁾

3月19日、第33回卒業式が本学体育館にて挙行された。経済学部422名、経営学部415名、人文学部英語英語英米文学科82名、同社会学科114名が卒業した。大学院経済学研究科修士課程3名、経営学研究科修士課程4名が修了した¹⁹⁾

稲生学長の式辞は次の通りで、生涯学び続けること、真実を追究し続けること、社会の平和の大切さ、二度と戦争をしてはならないこと、そして、どんな逆境におかれても楽観的に、勇気と希望を失うことなく、人生を堂々と歩んで

16) 『学内報』第79号、1983年7月1日。『学園報』第60号、1983年7月20日。『学内報』第83号、1983年11月。『学内報』第87号、1984年3月。『学内報』第88号、1984年4月。

17) 『学内報』第87号、1984年3月1日。

18) 『学内報』第88号、1984年4月1日。

19) 『学内報』第88号、1984年4月1日。『学園報』第63号、1984年4月1日。なお、10月卒業を含むと、経済学部426名、経営学部417名、人文学部英語英米文学科84名、同社会学科114名が卒業。

ください、と述べた。

「本日、茲に御来賓各位の御臨席を賜わり、昭和五十八年度学位記・卒業証書授与式を挙行致します事は、本学のもっとも慶びとするところであります。

御多用のところ、愈々御光臨賜りました御来賓各位に対しまして厚くお禮申し上げ、卒業生並びに御家族の皆様に対しまして衷心よりお祝いを申し上げます。申すまでもなく卒業生は大学のもっとも重要な成果であり、大学の存在価値を世に問うものであります。本日目出度く門出するこれだけの諸君が、それぞれに立派な社会人として各地域、各職域で幅広く活躍する事を考えますと誠に心強いものを覚える次第です。

扨て、卒業生諸君の栄ある門出を祝福し、前途の多幸を祈って激励の言葉を贈りたいと思います。

今から四年前の入学式に臨み、私はこれからの四年間、諸君は「田を耕す」かわりに諸君の「精神を耕す」ことに精励することを強調致しました。憶えておられるでしょうか。諸君は今どれだけの成果を意識化しているかは別として、本学に身を置いたこれまでの時間と空間、これまでの活動を通して、それぞれの程度において精神を耕してきたのであります。将来、きっと大学生活をして良かった、そしてもっとやっておけば良かったと思う時がくるでしょう。今日からは愈々社会を支える社会的総労働に参加して、いわゆる「田を作らなければなりません」。良き社会人となり、豊かな人生を築く為には、富の生産やサービス労働に励むと同時に、更に精神を耕すこと、知的能力を絶えず鍛えることが必要であります。学ぶということは学校だけに留まるものではありません。諸君は実業に就いてから、仕事や先輩同僚から、ありとあらゆるものから貪欲に学びとるべきであります。人間の生涯は学び続ける過程であると思います。どうかそれぞれの仕事に精励し、仕事の出来る人間になる事と共に、精神的に、人格的に出

来た人間になる事を期待して止みません。「過去は人間にとって精神である」というポール・バアレリーの言葉は人間の生涯を総括した一つの優れた持論であると思います。人間は生涯の間に種々の営為をなし様々の業績を築くのでありますが、形ある実践よりも何を作った、何をしたという事柄よりも、いかに考え、如何なる精神で生きたのか、という事の方が不滅の輝きをもつものであります。本学の三実主義はこの人生不滅の精神を示したものであり、私は諸君が実社会の矛盾、対立、制約の社会関係のもとで真実を求め、真実をつかみ、真実を行なうという難事に挑み、自分の過去に明らかな精神を見出す生涯を築くことを望むものであります。

あと、十数年を残すのみとなった、この我々の廿世紀は二つの大戦争と大恐慌を生じ、社会主義体制を現出し、科学技術の急速な進展による宇宙利用、マイクロエレクトロニクスとバイオテクノロジーによる第三の産業革命の進行、他方、世界経済の不均等な発展と各国政の不均衡と対立の激化など、内外の政治経済文化の激動の時代であります。

特にこの最後の四半世紀は「転換」の時代の警鐘が鳴り渡っています。諸君の在学中四年間の間にさえ、如何に大きな事件が起きた事でしょうか。マスコミが扱ふ年々の十大ニュースは氷山の一角に過ぎません。世界の平和と進歩は人類の共通にして最大の課題であります。それを達成する動力は、人類の意思と行為である事は言うまでもない事です。人間はすべて孤独に存在できるものではない、社会的動物であります。世界の為に、人類のために、国際社会の為によく生きるという平凡な市民の意識と行動が、この転換の時代を明るい正しい方向に進める根本的動力であることを銘記すべきであります。

諸君には抽象的な理念に過ぎないと思われるかも知れませんが、第一次大戦も第二次大戦も、あのヒットラーの怖るべき人間否定のファシズム支配も、一つには国民の多くが目先の利益と幻想、あるいはマイホーム主義のエゴイズムに流された事から生じたという事は否定できない事実であり

ます。

民主主義社会の戦争の責任は、政治家、軍人だけのものではなく、国民全体の負うべきものであり、二度と過ちを犯してはならぬのであります。人類生存の母なる大地、地球上の大自然も、近くは郷土の自立環境も、平凡な住民一人一人の智恵と努力がなければ、やがて荒廃するであります。

社会の平和、人間の生命を守るという大きな課題は、我々の身近な日常の形成に直接かかわっています。例えば昭和五十六年の北炭夕張炭鉱の事故、羽田日航機の墜落、今年の三池炭坑の事故、最近判決の下った財田川事件、カネミ油症事件等々、枚挙にいとまない程です。これらの事件を通じ思う事は、一定の社会関係のもとに置かれた人間にとって、如何に真実を行うことが難しく、それだけに大切であるという事です。財田川事件の再審に生命をかけた元裁判官矢野伊吉氏の生き方は、我々通常の職業人に貴重な教訓を与えるものであり、平凡な職業人一人一人のこのような科学と情熱に根ざす真実の処世が、大きくは社会の平和と進歩を築くものである事を自覚すべきではないでしょうか。

人間はどんな逆境におかれても生きなければなりません。そして生きるならば楽観的に生きるに限ります。それには真実を大切に生きて生きる以外にないでしょう。諸君が常に希望と勇気を失うことなく、人生の王道を堂々と歩み、立派な精神を実現されることを祈ってやみません。最後に諸君の御健勝と御多幸を念じて、はなむけの言葉と致します。

昭和五十九年三月十九日

松山商科大学

学長 稲生 晴

〕²⁰⁾

20) 松山大学総務課。『学園報』第63号、1984年4月1日。

3月23日、大学院の入試が行なわれ、経済学研究科修士課程は2名が受験し、合格者はゼロであった。博士課程の志願者はなかった。経営学研究科は修士課程2名が受験し、2名が合格した。また博士課程も2名が受験し、2名が合格した²¹⁾

3月31日、経済学部のマクマン（英語）、人文学部の八木亀太郎（言語学、元、学長）、短大の小原一雄（中国語）らが退職した²²⁾

6）1984年度

稲生晴学長・理事長5年目である。経済学部長は田辺勝也が続けている。経営学部長は高沢貞三に代わって新しく井出正が就任した（1984年4月1日～1986年3月31日）。人文学部部長は渡部孝が10月30日まで続けたが、11月1日より星野陽に代わった（1984年11月1日～1986年10月30日）。星野は再登場であった。経済学研究科長は入江奨に代わり新たに伊達功が就任した（1984年4月1日～1990年3月31日）。経営学研究科長は井上幸一が続けた。

全学の校務体制は、教務委員長は原田満範、学生委員長は前田繁一が引き続き務めた。入試委員長は増田豊に代わり、新たに松井茂樹が就任した（1984年4月1日～1985年3月31日）。図書館長は神森智が続けた。経済経営研究所長は理事に就任した山口卓志に代わって青野勝広が1984年1月1日に就任した（～1988年12月31日）。事務局長は竹田盛秋が続けた。

学校法人面では中川公一郎、山口卓志、高沢貞三が引き続き理事を務め、稲生理事長を支えた¹⁾

本年度も新しい教員が採用された。経済学部では川崎典子（英語）が講師として採用された。経営学部では村上宏之（会計学）が講師として、東潤則之が助手として、また、人文学部では大谷信介（地域社会論）、仲田誠（マスコミ

21) 『学内報』第88号、1984年4月1日。

22) 同。

1) 『学内報』第88号、1984年4月1日。『六十年史（資料編）』126～131頁。

論)が講師として採用された²⁾

4月1日、稲生学長は新入生に対し、『学園報』第63号に「これだけはやったと言えるように」と題した歓迎の辞を載せた。そこで、稲生学長は、大学は学問を深めるところである、高校時代と異なり、問題も解答も定まっておらず、自分の頭で学問対象と格闘しなければなりません。受け身ではなく、積極的に課題にとりくみ、これだけはやったと言えるように実行してみてください、と述べた³⁾

4月2日、午前10時より本学体育館にて入学式が挙行された。経済学部468名、経営学部476名、人文学部英語英米文学科110名、同社会学科127名が入学した。また、経済学研究科修士課程は3名、経営学修士課程は5名、同博士課程は2名が入学した⁴⁾

稲生学長の入学式の式辞は次の通りで、本学の建学の精神と特色ある学風について、本学園にはオーナーが居らず、教学と経営が一致した学園自治体制であること、それは、温山翁の金は出すが、学校の事は教職員に一任するという方針に起因すること、そして、学風は、良心的な運営と非官僚的家族主義的なエトスと述べ、ついで、校訓について田中校長が定式化した「三実主義」(真実・実用・忠実)を説明し、最後にハンス・カロッサの「美しき惑いの年」を送った。

「春光地に満ちて万象生氣を發する折柄、本日茲に昭和五十九年度の入学式を挙行致しますことは本学にとってもっとも慶びとするところであります。御多用のところ態々御臨席を賜りました御來賓各位に対しまして厚くお礼申し上げますと共に、入学生諸君並びに御家族の皆様に対しましては衷心よりお祝いを申し上げます。一九二三年に旧制松山高等商業学校

2) 『学内報』第88号、1984年4月1日。

3) 『学園報』第63号、1984年4月1日。

4) 『学内報』第89号、1984年5月1日。

として発足し僅か五十三名の入学生を迎えて以来、本学は今年創立六十一年月を迎えたのであります。新入生諸君は創立以来第六十一回目、大学制度で数えると第三十六回目の入学生であります。この長い光輝ある歴史と伝統を持つわが大学が、ここに清新発らつとした一千余名の諸君の血潮に依って更に躍進することを思うとき誠に心強く頼もしいものを覚えるのであります。愈々今日から本学の学生として、長い学校生活の最後を飾るべき諸君に対して、諸君の大学生活がそれぞれに実り多い人生の一齣となることを切望して所懐の一端を申し上げたいと思います。

凡そ、歴史を経た私立大学はそれぞれの建学の精神と特色ある学風をもっているのですが、私はこの際、特に本学の運営の特徴と教学の基本的な指針に就いて述べこれから同志となる諸君の深い理解を求めるものであります。わが松山商科大学という大学は学校法人松山商科大学という法人が設置し経営するものであります。私立というのは学校法人が設置するものであるという事であり、言う迄もなく国立は国が設置し管理するものであります。一般的に見ると私立の場合、オーナーが法人を支配し、法人が大学を支配する例が多く往々にして法人側と大学側の対抗対立関係を生じているのでありますが、本学の場合は伝統的に大学の教職員に就任している者が法人の役員を兼務する形をとっている事により教学と経営が事実上一元化されております。このような教経一致の運営体制が他の全国、国公私立大学に較べて一つの基本的な特色となっているのでありまして、教育研究の中心の真の学園自治体制を誇りにしているのであります。この事は大正十二年に独りで巨額の創設費並びに創設基金を拠出された新田長次郎温山翁が金を出しても、学校の事には一切介入、干渉せず学校のことは教職員に一任するという方針を一貫された事に起因するものであり、歴代の学内構成員がその信義に応えて守り育ててきた事に深い感謝の念を覚えるのであります。本学の私心のない良心的な運営と非官僚的家族主義的なエトス（気風）はこのような運営体制のもとで醸成された尊ぶべき学風

であります。

次に本学には高商初代校長加藤彰廉先生の訓辞に初まり三代目校長田中忠夫先生により確立された三実主義と称する、校訓があります。これは六十年を越えて刻み込まれた本学の伝統的な人間形成の原理であります。本学の卒業生が全国各地各職域において活躍し高い社会的評価を受けているのはこの校訓に基づく精神的薫化によるところが大きいのであります。三実主義とは真実、実用、忠実を旨として生活をたてる事であります。真実とは真理に対するまことであります。皮相な現象に惑わされないで進んでその奥に真理を求め、枯死した既成の知識に安住しないでたゆまず自ら科学する態度であります。実用とは用に対するまことであります。真理を求めて学問教養を高めると同時に生活者として実業、職業、実生活の技能、技術を身につける態度であります。言葉を換えれば高きを思うとともに低きを行う心構えであります。忠実とは人に対するまことであります。人の為に図っては己を虚うし、人と交わりを結んでは終生、節操を変えず自分の言行に対してはどこまでも責任をとるという態度であります。これは科学や技術の根本である人間の徳義あるいは信義を重んずる心得であります。

以上、三実主義は教育研究機関としてのわが大学の実践原理であり、又、個人の人生の生活原理ともすべきものであります。諸君が三実主義を明確に意識化し尊重することを心からお願いする次第であります。

自然は一年に一度春を迎えますが人間の青春はその生涯の間に一度しかありません。歴史に残る非凡な人の一生をみても、平凡な多数者の一生をみても諸君の大学四年間という年令期がいかに重要な意味をもつものであるか、計り知れないものがあります。痛感させられるものがあります。どうか貴重な青春の時を浪費する事なく一定の目標をたてて悔いのない生活を送っていただきたいものです。

最後にハンス・カロッサの「美しき惑いの年」の一節を引用し諸君の心

底に訴えたいと思います。「先人たちが彼らの時代を見たような内的な眼で、あなたの時代を見ることを学ぶのが肝要です。貴方の内部を掘り下げ、貴方の存在の核心を探究していただきたい、が決して性急におち入ってはならない。ただ新しいからといって、それを解決とみる事を避けるべきです。憧憬に満ちた貴方の青春を存分に楽しまれるように。しかし感〔官〕能的な享楽生活への欲求を制御する事を学んでいただきたい。私の言葉に耳をかたむけていただきたい。貴方が貴方自身の内部に蓄える一つ一つの火花の力が、貴方の天分の根原を養うに至るのです。わたしは禁欲を説くのではない。我々は誰しも過ちや罪を経て真理に到達する以外に道はない。しかし貴方は、できる限り、貴方の心の純潔を守らなければならない」

この一文は練達の批評家ライクスネルが、文学青年カロッサに宛てた書簡の一部であります。歩もうとする道は異なっているが、カロッサと同じ青春時代に揺れ動く諸君に贈る言葉として、私は適切なものを覚えるのであります。ここには自分の価値を求め、それを生み出そうとしてあれこれと迷いさまよう青年に対する鼓舞激励と戒めが、生き生きと温かく語られています。

諸君が、わが大学において生涯の師に出会い、生涯の友に出会い、生涯の書物に出会って、幸多い大学生活を送られる事を心から祈念して諸君を迎える言葉といたします。

以上

昭和五十九年四月二日

松山商科大学長

稲生 晴

〕⁵⁾

5) 松山大学総務課。

この式辞の中で、稲生学長は校訓「三実主義」について本格的に説明した。田中忠夫先生を高く評価する稲生先生は、田中忠夫の順序(真実・実用・忠実)により説明した。しかし、これまでも述べたように、稲生学長の「三実主義」の順序は、星野通の順序・『学生便覧』の順序と異なっていた。もし、変更するなら、学内で審議した上で、変更し、『学生便覧』を書き直す手続が必要であったが、その手続をされなかった。だから、稲生学長の順序の変更は定着しなかった。

9月20日に『松山商科大学六十年史(写真編)』が刊行された。編集委員長は望月清人教授で、この写真史の編纂には井出正、神森智、星野陽、竹田盛秋、渡部重久が携わった。この写真編には、写真の掲載だけでなく、元学長や名誉教授、事務局長など15人が思い出を寄せている。大鳥居蕃「『松山商科大学三十年史』補遺」、増岡喜義「田中先生と新田家の思い出」、八木亀太郎「難波津悲帖」、太田明二「回顧 松山商科大学」、伊藤恒夫「『教育』と『研究』の在り方を求めて」、稲生晴「大学院設置の思い出」、古茂田虎生「途中乗車」、菊池金二郎「商大の思い出」、小原一雄「短大回顧」、越智俊夫「おじんの繰り言」、井上幸一「教授会の思い出」、入江奨「学生の自主的研究活動の動向の一齣」、神森智「政治活動禁止規定のことなど」、墨岡博「事務組織の変遷にみる六十年」、竹田盛秋「回想－松田池のこと」など⁶⁾。それらは、本学の歴史の一齣を綴っている。その中で、入江、神森教授の一文は学生の自主的研究活動や政治活動の動向を伝える出色のものであった。

9月21日、渡部孝人文学部長の任期満了(10月31日)に伴う人文学部長選挙が行なわれ、星野陽が選出されている(2度目)⁷⁾。

9月22日、大学院入試(修士課程、9月期)が行なわれた。経済学研究科は志願者はゼロであった。経営学研究科は5名が受験し、2名が合格した⁸⁾。

6) 「松山商科大学六十年史刊行」『学園報』第65号、1984年12月1日。

7) 『学内報』第94号、1984年10月。

8) 『学内報』第94号、1984年10月。

なお、本年度も、学生の自主的研究活動発表の場である、第24回中四ゼミ（11月10、11日、山口大学）、第31回全日ゼミ（11月23～25日、立命館大学）、が開かれているが、その詳細は不明である⁹⁾。

11月14日、稲生理事長ら大学当局は、「学園構想委員会」の報告書（1983年7月）に基づき、法学部を設置すべく、法学部設置委員会を設置した。委員は山口卓志（教学担当理事）、高沢貞三（総務担当理事）、田辺勝也（経済学部長）、井出正（経営学部長）、星野陽（人文学部長）、越智俊夫（法律関係）、石原善幸（同）、前田繁一（同）、森田邦夫（同）、三浦正孝（一般教育関係）で、委員長は山口卓志教学担当理事であった¹⁰⁾以後、山口委員長を中心に議論が進められていった。

11月18日、1985年度の推薦入試が実施された。結果は次の通りである¹¹⁾。

	推薦入学人員	志願者数	合格者数
経済学部	約 90 名	126 名	108 名
経営学部	約 100	117	108
人文(英)	約 20	26	25
人文(社会)	約 30	48	47

このように、今回の推薦入試においては、前年までと異なり、経済、経営ともに少なからず不合格者を出した。当初の推薦入試の趣旨にもとづく受験生が推薦されていないことへの反省からしほったためであった。

12月、『創立六十周年記念論文集』が刊行された。経済編8人、経営編8人、会計編6人、法律編2人、社会学編3人、語学・文学編6人、教育学編2人、体育編3人が執筆している¹²⁾。

9) 松山商科大学経済学部清野ゼミナール『AD2001』第3号、1985年3月。清野ゼミは中四ゼミと全日ゼミ（インゼミ）に参加し、発表している。

10) 『学内報』第96号、1984年12月1日。『学園報』第69号、1985年12月1日。

11) 『学園報』第65号、1984年12月1日。

1985年2月3～4日、1985年度推薦入学者(経済108名、経営108名、人文英語25名、社会47名)のガイダンスを国立大洲青年の家で合宿して行なった¹³⁾

2月11日、田辺勝也経済学部長の任期満了に伴う学部長選挙が行なわれ、第10代経済学部長に比嘉清松教授(48歳)が選出された¹⁴⁾

2月10～12日、1985年度の一般入試が行なわれた。9日が人文学部、10日が経済学部、11日が経営学部であった。募集人員は経済350名、経営350名、人文学部英語英米文学科80名、同社会学科100名であった(推薦を含む)。試験会場は、本学、京都(予備校)、岡山(岡山学院岡山校)、広島(広島工業大学)、福岡(水城学園)、高松(高松予備校)の6会場であった。検定料は2万円。本年度は丙午の年に生まれた高校生の受験年度で、当初から志願者の減少が予想されていた。志願者は経済学部2,195名(前年2,373名)、経営学部1,955名(前年2,508名)、人文英語382名(前年453名)、人文社会591名(前年984名)、合計5,123名(前年6,318名)であった。合格発表は2月21日。経済学部942名、経営学部942名、人文学部英語英米文学科254名、同社会学科322名、合計2,460名を発表した。なお、経済学部と社会学科は不足し、第1次補欠として経済51名、人文社会20名を出した。

学費は入学金14万円(前年度13万円)、授業料32万円(前年度30万円)、施設整備費7万円(前年度と同じ)、その他2万9,850円、合計55万9,850円で、入学金1万円、授業料2万円を値上げした¹⁵⁾

3月7日、井上幸一経営学研究科長の辞任に伴う後任研究科長選挙が行なわれ、越智俊夫教授が選ばれている¹⁶⁾

3月15日、稲生学長は卒業生に対し、『学園報』第66号に「送別のことば」

12) 松山商科大学『創立六十周年記念論文集』1984年12月。

13) 『学内報』第98号、1985年2月1日。

14) 『学園報』第66号、1985年3月15日。

15) 『学内報』第90号、1984年6月1日、『学内報』第95号、1984年11月1日、『学内報』第98号、1985年2月1日。『学園報』第66号、1985年3月15日。

16) 『学内報』第100号、1985年4月。

を載せた。そこで、稲生学長は、「精出して、燃えて、よく生きよ」と激励した。そして、人の一生は短い、諸君がそれぞれの存在価値を自覚し、自分の生命価値を尊び、よく生きること、自分の可能性を追求し、自分を成長させ、自分の花を咲かせることを願うと述べた¹⁷⁾

3月20日、午前10時より体育館にて第34回卒業式が挙行された。経済学部401名、経営学部454名、人文学部英語英米文学科82名、同社会学科111名が卒業した。経済学研究科修士課程は1名が修了した。経営学研究科修士課程は2名が修了した¹⁸⁾

稲生学長の卒業式の式辞は次の通りで、ゲーテも引用し、現代社会の様々な諸問題に対し、平和と繁栄を求める方策を誤まらぬよう、本学で学んだ社会科学を導きの糸として、生き抜いてくださいという、格調高いものであった。

「本日、ここに昭和五十九年度学位記卒業証書授与式を行うに当り、多数のご来賓並びにご父兄の御臨席を賜わり壱千名を越える新卒業生と教職員の出席のもとに目出度く盛大に挙行できますことは、私の最も光栄とし喜びとするところでありまして、謹んで厚く御礼申し上げます。

本日、晴れの卒業を迎えた者は、大学院経済学研究科修士課程一名、同経営学研究科修士課程二名、経済学部四〇一名、経営学部四五四名、人文学部英語英米文学科八二名、同社会学科一一一名、以上総数一、〇五一名であります。

大正十五年三月八日に松山高等商業学校の第一回卒業生、四三名を世に出して以来、六十年の星霜を経て、当年の卒業生数が今や二十数倍の規模に達していることを思うと感慨一入深いものを覚えます。高商、経専、大学、短期大学の今日までの卒業生の数は約二万七千名を越え、国内外の各

17) 『学園報』66号、1985年3月15日。

18) 『学内報』第100号、1985年4月1日。なお、1984年9月期の卒業生を加えると、経済学部405名、経営学部458名、人文学部英語英米文学科82名、同社会学科111名が卒業。

地、各職域で活躍しています。卒業生は学園の至上の成果であり、何よりも学園の社会的存在価値を世に問うものでありますが、ここに集う約千名の諸君が新たに加わることによって、卒業生及び大学の勢力が一段と伸展することを思うとき、誠に心強いものを覚える次第であります。

さて、過ぎ去った日々は短く、取り留めもない感想と新しい職業生活への不安が交錯して卒業生諸君の心境は複雑なものがあると推察致しますが、唯一、諸君、共通の感慨は、今や大学生活という一つの業を終えて、小学校以来約十六年間の長きにわたる学校生活にいよいよ別れをつける時が来たという事であろうと思います。人生にはいろいろな節目がありますが、就学、就職、結婚は三大節目であります。それぞれの節目を大切にきて次の新しい生活に立向い、自らのかけがえのない貴重な人生を創造しきりひらいてほしいと思います。

今、正に学窓を去らんとする諸君に、最後に特に望むことは「これからさらに学ぶべし」という一事であります。ゲーテは「有能な人は常に学ぶ人である」と申しています。学校生活だけが学ぶ生活ではありません。学問をする事だけが学ぶ事ではありません。仕事、職場、社会、自然、そしてそういう場で、これから触れ合うであろうあらゆる人々、あらゆる情報から学ぶことができるのであり、学ぶ事は決して尽きることがありません。常に学ぶ心をもち続け、それを実践する事が自己の人格を高め、人生の幸福を勝ちとる唯一の生き方であると、私は信じて疑いません。

今日、地球の人間社会は益々狭くなり、内外の政治、経済、文化の関係が緊密の度を増して行くと共に、科学と技術の急速な進展により、大きな変革の時代を迎えています。人類の起源は数百万年を遡ると言われていますが、人類史の何万分の一にしか当たらないこの二十世紀の人間の物質的生産力の発展はすさまじいものであり、同時に社会的、国際的關係の変化と矛盾対立も巨大化しております。

このまま行けばどうなるのであろうかという不安を抱かない人はいないと

言ってよいでしょう。あと十五年で二十一世紀に入り、諸君はその時は社会の中堅年令に達するのであります。この時代的、世代的運命は、恵まれたものであるとともに苦しみも多いと思います。我々の生活の上には、次々と大きな課題、大きな波が押し寄せてくることを覚悟しなければなりません。この深く大きい波動の中において、もっとも大事な事は平和と繁栄を求める方途の選択を誤らぬ、しっかりした正しい長期展望をもって生き抜くことです。諸君が本学で勉強した事は主として経済学、経営学、法学、社会学、そして国際言語文化学と言ったいわゆる社会科学であります。これらの学問は、結局のところ社会における人間の法則と条件を探求するものであります。最近のハイテク、驚くべき技術の開発が人々の目を奪っていますが、大事な事は主体である、主人である人間と手段、家来である技術やシステムとの間の本末を転倒しない事であり、諸君が学んだ学問はそういう基本的思想を養うものであります。巨大にして精密化する機械、技術諸手段を人間社会の幸福の為にいかに利用するか、それに適合する人間および社会関係をどのようにすべきか、社会科学の意義は益々重大なものがあると考えなければなりません。本学で学んだ社会科学の素養が、諸君の社会的、歴史的な生活の導きの糸となり、これからの体験的学習の中でそれがさらに深められ、個人としてよき人生を形成することと、自分が属し抱かれている社会の平和と進歩を推進することを一つにして「よく生き」「よき花を咲かせる」ことを心から期待してやみません。最後に諸君の御健康と御健闘を祈念して諸君の前途に贈る言葉と致します。

昭和六十年三月二十日

松山商科大学

学長 稲生 晴 』¹⁹⁾

19) 松山大学総務課。

3月22、23日、大学院入試が行なわれ、経済学研究科修士課程は3名の志願者があり、1名が合格し、経営学研究科修士課程は4名の志願者があり、1名が合格した。博士課程はゼロであった²⁰⁾

3月30日、60周年記念事業の大きな柱として計画され、1984年2月から建設がすすめられてきた御幸総合運動施設（50メートルプール、サブアリーナ、研究・管理棟、部室棟、野外劇場）が完成した。そして名称を御幸キャンパスと決定した²¹⁾ また、その斜行エレベーターは建築業界で有名となった。

3月31日、経営学部の二宮周平（民法、法学）が退職し、立命館大学に転出した。

7) 1985年度

稲生晴学長・理事長6年目、最終年である。経済学部長は田辺勝也に代わり、新しく比嘉清松が就任した（1985年4月1日～1989年3月31日）。経営学部長は井出正が続けた。人文学部長も星野陽が続けた。経済学研究科長は伊達功が続けた。経営学研究科長は井上幸一に代わって越智俊夫が就任した（1985年4月1日～1985年12月31日）。

全校の校務体制は、教務委員長は原田満範が続けた。学生委員長は前田繁一に代わって金村毅が就任した（1985年4月1日～1987年3月31日）。入試委員長は松井茂樹に代わって八木功治が就任した（1985年4月1日～1987年3月31日）。図書館長は神森智が1985年12月31日まで続けた。経済経営研究所長は青野勝広が続け、事務局長は竹田盛秋が続けた。

学校法人面では中川公一郎、山口卓志、高沢貞三が引き続き理事を務め、最後の稲生理事長を支えた¹⁾

20) 『学内報』第100号、1985年4月1日。『学園報』67号、1985年4月1日。

21) 『学内報』第100号、1985年4月1日。

1) 『学内報』第100号、1985年4月1日。『学内報』第101号、1985年5月1日。『六十年史（資料編）』126～131頁。

本年も新しい教員が採用された。経済学部では専任の採用はなかったが、三崎敬之（歴史）を教授（特任）として採用した。経営学部では占部都美（経営学原理、経営学概論）を教授（特任）として、佐伯滋（文章表現）を講師（特任）として、人文学部では今枝法之（社会学）、村田邦夫（文化史）を講師として採用した²⁾

4月1日、午前10時より本学体育館にて入学式が挙行された。経済学部432名、経営学部487名、人文学部英語英米文学科120名、同社会学科155名、経済学研究科修士課程1名、経営学研究科修士課程3名が入学した³⁾

稲生学長の入学式の式辞は次の通りで、本学に対し誇りをもち、大学生活において、学問に精出し、立派な田（将来の職業生活）を作る為に、しっかりと詩（学問文化）をつくること、その中で、精神、頭脳、人間性を鍛え、社会の法則を探求し、社会の進歩と平和のために尽くすよう述べた。

「本日茲に多数の御来賓各位並びに御父兄の御臨席を賜わり、昭和六十年大学三学部及び大学院二研究科の入学式を挙行できますことは、私の最も光栄とし喜びとするところであります。

この栄えある式典に寄せられた関係各位の御厚情と御祝辞にたいし厚くお礼申し上げ、入学生諸君と御家族の皆様にあたいして衷心よりお祝い申し上げます。

新入生諸君、正に城春にして百花開かんとするとき、昭和の御代の新たな画期を覚えるこの六十年度に目出度く入学する諸君を心から歓迎し、本学における諸君の最後の学校生活の成功を祈って所懐の一端を申し上げます。

第一に、新入生諸君に求める事は「本学にあたいして誇りを持つ」という事であります。この訓示は今から四二年前、即ち昭和十八年の春、私が本

2) 『学内報』第100号、1985年4月1日。『温山会報』第28号、1985年11月。

3) 『学内報』第101号、1985年5月1日。

学の前身松山高商に入学した時、田中忠夫校長から承った訓示の冒頭の言葉であります。四十年も昔の話は、諸君にとっては縁遠いものでありましょう。しかしながら、この言葉は私の青春の思い出の中に鮮やかに浮かぶものであるばかりでなく、過去、現在、未来を貫いて毎年、新入生諸君に啓示すべきもっとも重要な真実のことばであると思います。昔も今も新入生の心情には共通したものがあります。本学に入学できた事を喜んでゐる者、特別の感動を覚えない者、あるいは非自発的な入学の為に心定まらぬ者、入学生諸君の心境は複雑なものがあると存じます。今この出発点に立って、諸君がいかに自分の気持を整理し、本学での生活に全力投球をする心構えを定めるかどうか、諸君のこれからの大学生活の成果を左右するのであり、そういう意味において冒頭の言葉は、大学が諸君にたいし上から強制するものではなく、諸君自らが自分にたいして誇りをもつことを求めているのであります。

諸君の心に訴える第二の課題は、学問に身を入れよ、精出して学問をせよ、ということであります。学問をすることは大学にとって当り前の事ではありますが、日本の現状は残念ながら当り前の事が当り前でなくなっております。私の青春時代は女に学問はいらない、商売人に学問はいらない、百姓をやるのに学問はいらぬ、と言い、学問や文化に憧れる若者にたいしてよく「詩を作るより田を作れ」と言われました。この譬えの中の「詩」とは広く学問文化を象徴するものと解釈してよいと思います。従って「田を作る」という事も広く生活所得を得るための仕事、職業と考えてよいでしょう。人間が衣食住なくして生存することができない事は言うまでもありません。人間はその悠久の歴史を通じて田を作らずして生きていけないし、学問文化もできないのであります。物質的生産力のもっとも低い時代の人間は、一日生きて行くのに一日中田を作らなければならなかったと言つてよいでしょう。それでは学問文化を行う時間がありません。そういう状態から、我々の祖先は手を使い、頭を使い、道具を工夫して生産性を

徐々に高め、その中から学問文化も発展さしてきたのであります。それでは自然的環境に恵まれて、衣食住に不自由しなければ、学問文化が発展するでしょうか。南洋の楽園ではなく、砂漠と洪水と荒野の地帯に、牧畜、農耕とその文化が発達したことの中に、我々はいわゆる田作りと詩作りの深い相互関係、そして又、自然と人間社会との関係を考えなければならぬのであります。さて、諸君の大学生活は社会の恩恵を受けて自由に詩をつくり、自分自身の人間的能力を培養し、豊かな人格を形成すべき十六年間の学校生活の最後の課程であります。又、言うまでもなく日本の将来の立派な田を作る人材の育成過程でもあります。詩に譬えましたが、諸君が本学で勉強することは、主として経済学、経営学、法学、社会学そして国際言語文化学といった社会人文科学の分野であります。これらの学問は結局のところ社会における人間の法則と条件を探求するためであります。最近時のハイテク、驚くべき技術の進展が人々の耳目を奪っている状況であります。ここでもっとも大事なことは何か。私は主人である人間と手段である機械やシステムとの関係の本末を転倒しないこと、させない事であると考えます。諸君が学ぶ本学の学問は、両者の関係、両者の相互作用を追究するものであります。巨大化し精密化していく技術と諸手段を人間社会の真の幸福の為にいかに利用するか、それらを用いる事によって起きる問題は何か、それを解決する人間と社会の存在条件は何であるかを、今こそ精励に追究しなければならぬ時代であり、社会科学の意義と役割は益々重大なものがあるのであります。

大学での学習方法は入学学力テスト目標型の管理学習でもなければ、記憶と正解法インプット型の受験用人工頭脳の形成ではありません。日本の小、中、高校生の学習時間と学力テスト水準は世界でベスト、ナンバーワンと言われています。しかし時間や点数といった数字に表れない教育の基本から、つまり「人間形成」の視点からトータルに評価した場合、考慮すべき状態であることは否定できない事実であります。今、何故、思いきっ

た教育改革を求め、教育臨調をやらねばならぬのが、そのことを示しているのです。

更に諸外国に比べて対照的な事は、日本の大学生の学習時間と学力水準であります。高校時代より著しく低下する学習時間、学問にたいする価値観と目標の喪失、アルバイトとレジャー悦楽型の風潮は、世界におけるワースト、ナンバーワンの汚名を免れることはできないでしょう。創造的能力はおろか知識集積に限っても、日本は小、中、高校と上昇し、大学で下降して行くというゼット機飛行型であること、そしてその事が個人的にも社会的にもどれ程の浪費と損失であるか、大学と学生がともに反省し、改善しなければならぬ重大問題であります。諸君は本学において多年身についたテスト主義の学習態度を清算して、単位取得主義ではない、自由にして自発的な、人工頭脳でなく、人間頭脳の鍛錬と開発に邁進することを切望します。言い古された言葉であります、「未来は青年のものであります」。次代を発展させる為に、本学で知的労働、知的生産に励み、自己の革新と人間形成に努めて下さい。今は、諸君は詩をつくることに集中し、将来の田作りに備える時期であります。立派な田を作る為に、しっかりと詩をつくることです。それによって精神をつくり、頭脳をつくり、人間としての基礎能力が形成されるのです。大学は人間を作るドックであります。社会の進歩と平和のために、大学はその責任を果さねばなりません。常に個人は社会的関係の中にあり、社会的関係とともに発展するものであることを忘れてはならないのであります。我々も、諸君も、社会にたいして我々の自由な詩をつくる時間と空間を与えられている事を深く感謝し、常に社会のため、世界の為に個人の人間性の向上に努めなければならぬと考える次第です。

最後に、諸君がこの学園生活において生涯の師、生涯の友を得、大学生活の花を咲かせ、良き実を結ぶことを心から祈念して式辞と致します。

昭和六十年四月一日

松山商科大学

学長 稲生 晴 』⁴⁾

9月21日、大学院の入試が行なわれた。経済学研究科修士課程は3名が受験し、2名が合格した。経営学研究科修士課程は10名が受験し、6名が合格した⁵⁾。

9月30日、稲生理事長ら大学当局は、1986年度から始まる18歳人口の急増期に応じるために、1986年度から1992年度までの期間を限定した臨時定員増を文部省に申請した。それは次の通りである⁶⁾。

経済学部	350 → 400 名
経営学部	350 → 400
人文英語	80 → 100
同 社会	100 → 120

10月30日、稲生理事長ら大学当局は、公約に従い、本学に法学部を設置することを決定した。昨年11月に法学部設置委員会（委員長山口卓志教学担当理事）を設置して、10回に及ぶ会議をへて、そして、9月26日の合同教授会、10月30、31日の理事会、評議員会で承認を得た。1988年4月開設を目標に1986年7月末までに文部省に申請すべく準備に入った。法学部設置の趣旨は、第1に文科系総合大学としての学際的な教育研究を一層充実させることができること、第2に法律知識を持った人材を養成することで地域社会のニーズに応えること、第3に法学部の設置によって本学の水準を高め、私学間競争に堪える体力をつけること、であった⁷⁾。

4) 松山大学総務課。

5) 『学内報』第106号、1985年10月1日。『学園報』第69号、1985年12月1日。

6) 同。

7) 『学内報』第108号、1985年12月1日。『学園報』第69号、1985年12月1日。

なお、本年度も、学生の自主的研究活動発表の場である、第25回中四ゼミ（11月9、10日、松山商科大学）、第32回全日ゼミ（11月29～12月1日、中央大学）が開かれているが、その詳細は不明である⁸⁾。

本年末で稲生学長の任期が満了するので、松山商科大学学長選考規程に基づき、10月17日に学長候補者推薦委員の選挙が行なわれ、経済学部から比嘉清松、田辺勝也、村上克美、望月清人、経営学部から岩国守男、中川公一郎、倉田三郎、高沢貞三、人文学部から渡部孝、星野陽が選ばれ、そして、11月5日、学長候補者推薦委員会（委員長渡部孝）が開かれ、そこで越智俊夫経営学部教授一人が推薦された。11月14日、越智教授に対する信任投票が行なわれ、越智教授（61歳）が学長に当選した⁹⁾。

11月17日、1986年度の推薦入試が行なわれた¹⁰⁾。

	推薦入学人員	志願者数	合格者数
経済学部	約 90 名	118 名	106 名
経営学部	約 90	86	84
人文英語	約 20	24	24
人文社会	約 30	35	35

12月25日、文部省より臨時定員増の認可がおりた¹¹⁾。

12月31日をもって、稲生晴学長が2期6年の任期を終えて退任した。

8) 松山商科大学経済学部清野ゼミナール『AD2001』第4号、1986年3月。清野ゼミは中四ゼミと全日ゼミ（インゼミ）に参加し、発表している。

9) 『学内報』第107号、1985年10月1日。『学内報』第108号、1985年12月1日。『学園報』第69号、1985年12月1日。

10) 『学内報』第108号、1985年12月1日。『学園報』第69号、1985年12月1日。

11) 『学内報』第109号、1986年1月1日。

お わ り に

稲生晴学長・理事長時代（在任：1980年1月1日～1985年12月31日）の功績，特記すべきことについてまとめておこう。

第1に，種々の教学改革を行なった。

- ①大学院経営学研究科の要請を受け，その博士課程を文部省に申請，開設した（1981年4月）
- ②時代の変化に対応し，学事日程を変更した（1981年度）。
- ③個性的な教育改革を実施した。
 - ・専門ゼミのゲストスピーカー制度の発足（1981年度）
 - ・カリフォルニア州立大学サクラメント校への短期英語研修講座を開設した（1981年度）
 - ・外国人特別講師制度を採用した（1983年度）
- ④個性的な推薦入試制度実施に踏み切った（1983年度）。
- ⑤学部長会規程を制定，施行し，民主的な大学運営をとった（1981年7月）。

第2に，施設面を充実・拡大した。

- ①本館（本館）と5号館を落成させた（1981年1月）。
- ②御幸に総合運動施設『御幸キャンパス』を完成させた（1985年3月）。

第3に，60周年記念事業を挙行した（1983年11月）。

第4に，『松山商科大学六十年史（写真編）』（1984年9月），『松山商科大学六十年史（資料編）』（1985年6月）を刊行した。しかし，60年史そのものは刊行されなかった。

第5に，かねてよりの課題として法学部開設を決断した（1985年10月）。

第6に，時代の要請に対応し，臨時定員増を文部省に申請し，認可を受けた（1986年度～1992年度）。

第7に，稲生学長は田中忠夫校長を高く評価していたことである。愛校心，

学園の拡張路線については共通するものがある。私見であるが、稲生先生は「戦後の田中忠夫的存在」と言っているだろう。稲生先生は、理事長退任後、自ら編集委員長となり、田中忠夫先生の評伝に尽力し、『田中忠夫先生』（1986年12月）を刊行した。そして、稲生先生は第1章「松山高商と田中忠夫先生」を執筆した。

第8に、校訓「三実主義」について、稲生先生は1期目には一切言及しなかったが、2期目、60周年から述べ始めた。その順序は、星野通学長の順序（真実・忠実・実用）と異なり、戦時の田中校長の順序（真実・実用・忠実）で述べた。しかし、学内で審議した上で順序を変更したのではなかった。だから『学生便覧』は星野通の制定当初の順序であり、齟齬がみられたことである。

第9に、稲生先生のマルクス主義の思想・信条・理念と大学経営との関連について。その思想・信条・理念は、入学式、卒業式の式辞の際に、その一端がみられた。大学経営については、基本は、「拡張主義路線」を推進したが、理事会主導型ではなく、学園協同体論を堅持し、委員会をつくり、民主的な手続きをとって進めていったことである－ときには、軋轢もあったが－。

第10に、研究面について、稲生先生の理事、理事長時代は長すぎた。16年8カ月に及ぶ。そして、理事・理事長時代のみならず、役職退任後の研究成果はあまりない。「滅私奉校」のせいだろう。稲生先生は田中忠夫校長と同じ道を進んだようだ。